

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	伊東さなえ
論文題目	災害とローカリティ —ネパール・ゴルカ地震に対応する人々の民族誌的研究—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、2015年にネパールで発生したゴルカ地震への人々の対応について論じたものである。特に震災の際に人々の帰属の対象がどのように複数の・重層的に表出したかを論じている。本論文は直接的には2014年から2018年にかけての347日間のフィールドワークにもとづくが、それ以前の2011年から2013年にかけての2年間、著者が青年海外協力隊員としてネパールのカトマンドゥ盆地に位置するキルティプール市の環境改善プロジェクトに関わった経験もいかされている。</p> <p>序章において災害に関する文化人類学的な研究について検討したあと、第I部では震災以前のカトマンドゥ盆地の状況を論じ、第II部では震災後を論じる。第1章では、ネワールというカトマンドゥ盆地に古くから住み着いてきた人々の社会と文化について概観する。第2章ではネワール社会における廃棄物処理という現代的課題をめぐる実践について論じる。ネワール社会の都市や村は、寺院や城壁、カーストごとの集住といった慣習などにより空間構成が決定されてきた。人的なつながりは土地にまつわるものと、親族にまつわるものという二つの関係性を中心に形成されてきた。他方、近代化や開発のプロジェクトを通して、それらとは異なるつながりが生まれ、帰属意識も重層化してきた。</p> <p>第II部では、地震への対応が描かれる。第3章では、震災の発生とその後の展開について、ネパール国家全体のレベルから分析し、政府と人々の双方からナショナリズムが高揚したありさまを記述する。「われらすべてネパール人」という感覚の高揚は、ボランティアや助け合いを促す一方、多文化主義・地域主義にもとづく運動を抑圧するはたらきもした。またこの章では、被災地における地域・個人による援助の格差についても論じられている。第4章と第5章では、具体的なカトマンドゥ盆地内の村の事例をもとに、災害に際してどのような対応が行われたかを詳細に検討している。第4章では、震災後にローカルな空間構成がどのように揺らぎ、どのように再生されたかについて、震災の瓦礫と、瓦礫処理のきっかけとなった死者追悼の祭礼に着目しながら論じている。第5章では、被災者たちの災害対応が、震災以前から存在していた多様なつながりに基づくものであると同時に、新たな関係も創出していたことを論じる。国外在住者たちも、村の内部で被災した人々も、それぞれの言葉で被災地について語り、その語りに基づいて人を集め、つながり、活動を立ち上げた。そこで使われたのは、具体的な村の名称だけではなく、行政市や地区の名前や、民族名や、友達や</p>			

学校の名前である。女性同士でつながるという語りをを用いてNGOからの援助を得るなど、グローバルな市民社会への接続も試みられた。近代化の中で登場した地区や女性グループ、学校などの枠組みは、緊急支援の参照点として機能し、つながりの形成に寄与した。

終章では、震災への対応に際して、しばしば「被災コミュニティ」や「地域社会」のレジリエンスという言葉で括られるものが、古くからある地縁や親族ネットワーク、近代化のなかで作られてきた様々なカテゴリー、新しい情報テクノロジーなどかさなりあう資源を人々が活用するなかで立ち現れていると論じる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は2015年にネパールを襲った大震災直後における、カトマンドゥ盆地の一地域の人々の対応を中心にすえて、災害時のレジリエンスについて論じ、そこからさらに広く現代における「ローカリティの生産」(A. アパドゥライ)のあり方について考察するものである。

本論文の学術的意義としては、以下の3点が挙げられる。

第1に、災害研究への貢献である。自然現象が人間の生命や生活に危険をもたらす事態と定義される「災害」の数は20世紀後半になって飛躍的に増大している。20世紀後半から災害の数が増大していることの一つの理由として、近代化にともなうコミュニティの脆弱化もしばしば挙げられる。しかし本論文は、近代と伝統的コミュニティという二項対立を用いない。アパドゥライの議論を参照しつつ、コミュニティやローカリティは、前近代においても近代においても、エントロピーに抗して不断に生産されつづけなければならない構築物であると論じる。そしてリスクとレジリエンスについて、リスクは近代のもので、レジリエンスは伝統的コミュニティによって可能になると論じるのではなく、ネパールの近代化以前からあるつながりと、近代化によってもたらされたつながりが、ともにリソースとして震災対応に活用された様を、実証的に詳細に明らかにしている。

第2に、廃棄物処理研究への貢献である。本論文はその前半で、カトマンドゥ盆地における急速な近代化と都市化と行政の機能不全による「ゴミ危機」に対して、女性住民グループが、リサイクル市場における経済的機会も活用しつつ、どのように積極的に対応したかを描いている。また震災後の状況に関しては、通行をふさぐ路上の瓦礫除去がだれの責任であるか明らかでないまま放置されていたのが、追悼の祭りの開催をきっかけに除去されたという事例について、南アジアにおける「ウチ／ソト」や「浄／不浄」の議論と有機的に関連づけながら説得的な議論を展開している。

第3に南アジア地域研究、特にネワール研究への貢献である。カトマンドゥ盆地のネワール社会研究の日本におけるパイオニアは1970年代に調査を行なった石井溥氏であるが、本論文はその調査地付近で、約40年後に行われたものである。本研究においては石井氏らによる先行研究で取り上げられている、ネワールの儀礼や浄／不浄の区別が、民主化の波や大規模な災害を経たカトマンドゥにおいてどのように用いられているかを生き生きと記述しており、実証研究としての高い価値を有する。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際

しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。